
セレブ(仮)

ショウコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

セレブ（仮）

【Nコード】

N9956A

【作者名】

シヨウコ

【あらすじ】

貧乏と強気以外は普通の女子高生の羽月。ところがお金持ちのおじいさんを助けたことで、いきなり社交界に仲間入りしてしまっ
て……

プロローグ（前書き）

この話の中のセレブたちは、作者の想像上の生物なので、あしからず。

ブローグ

にいがきはつき
新垣羽月16歳。普通的女子高生。勿論独身。

それなのに、

す。

私、今日から由緒正しい財閥のお嬢様で

何故こんなことになってしまったのか。話は三日前にさかのぼる。

深夜というに

はまだ早い午後十時。私は繁華街を歩いていた。

なぜこんな時間に外を出歩いているのかはまあ、もったいつけて話すほどの話ではないので今話させて頂く。

私の家は母子家庭で、しかも母は病気で長期入院している。生活が苦しいからアルバイトをしていてこんなに遅くなったというわけだ。さて、結構重たい話なのに五行で終わってしまったが、そんなことはどうでもいい。問題はそのあとだ。

その日は厄日だったのだろうか。面倒なものを見てしまった。

「おじいちゃんすつごい高そうな時計もってるねー」

「うちに金貸してくんない？孫におこづかいやると思ってたさあ」

典型的なオヤジ狩り。いや、おじいちゃん狙ってるから、ジジイ狩りだろうか。なんにしても、あたしは目の前でお年寄りがたかられてて平気で通り過ぎれるほど冷たい人間じゃない。

（それにあたしおじいちゃん子なのツツ！！！！！！！）

「ちょっと!! あんたらなにやってんの!!??」

「あ?..... なんだよ女かよ」

おじいちゃんを取り囲んでいた男たちがこっちを向いた。おじいちゃんもあたしに気付く。

(うわっ..... 超お金持ちそう)

格好もそうだけど、なんていうか、おじいちゃんの周りだけ雰囲気が違う。

仕草から眼差しまで、気品に溢れてるっていうか...

「なにばーつとしてんのぉ? おねえさんが代わりに俺らにお小遣いくれんの?」

それに比べてこいつらの下品な顔つき。胸焼けがするわ。

「あんたらおじいちゃん離しな。警察呼ぶよ」

「なんだこの女... おい、やっちまおうぜ」

ここからは一応自主規制ってことで。ほら、残酷なシーンとかって映画でもカットされるじゃない。

「おじいちゃん、大丈夫?」

おじいちゃんは自分より少し高い位置にあるの顔を見上げた。

「ありがとう。私は大丈夫ですよ。あなたが助けてくれた」

なんだか自然に背筋が伸びる。

ゆっくりはつきりと話す言葉のひとつひとつが、重くて心地よい。

「お強いんですね。あなたのような勇敢な女性は見たことがない」

「はあ……どうも………」

「ぜひともお名前を伺いたい。…よろしいですか？」

え、どうしよう……ちょっと怪しいんだけど……いいかな。名前だけだし。

「新垣羽月です。羽に月と書いて、羽月。」

「羽月……いい名前だ。」

感動を表すようにおじいちゃんは目を閉じた。

「羽月さん、今日は本当にありがとう。このご恩はいつか必ず」

そう言っておじいちゃんは去っていった。

私も

「いいことしたなあ」

ぐらゐの気持ちで、一日経ったらすっかり忘れてしまった。

……まさかこんなことになるなんて。

えにありがとうございました。
」

「新垣羽月様ですね。お迎

第一話

「ちょっ…お迎えにあがりましたって…！どういうこと…！」

わけがわからない。こんなマンガに出てくるような黒ずくめの男に家の中まで入ってこられる覚えなんかないはずだ。

「私は葛城グループの会長、八重蔵様の使いの者です。早く車に乗ってください。八重蔵様がお待ちです」

葛城グループの八重蔵…？？葛城グループはよくテレビ番組の提供とかで見かけるけど…八重蔵って。知らねえよ。

「先日貴女は八重蔵様をお助けしたようですね。その良心と勇敢な行動に心打たれた八重蔵様は、貴女をぜひ養子にお考えなのです」

……ああ！！あのおじいちゃんか！！！！

……ていうか、養子って…あの養子？
養子と書いてヨウシ？

冗談じゃない。あたしには帰る家がある。一回助けたぐらいでその家の子にされてたまるか。

「貴女のお母様は随分長く入院生活を送っているようですね。」

「……なんでそこで母さんがでてくんのよ」

「こちらの条件を呑んでくだされば莫大な治療費は八重蔵様が負担

すると申しつかりました」

こいつら……あたしのこと調べたの？しかも、ずるい。こんなときに母さんのこと持ち出すなんて。

「実はもう母君には貴女の親権を譲り受けているのです」

「なっ……………!!」

母さん……………！？なんで……………。

「貴女は治療費、学費、生活費、e t c……………払うためにかなり無理なさっているようだ。そんな娘を楽にさせてやりたいと思ったんでしょう。利発で優しい母君ですね……………」

「母さん……………」

でも葛城グループの養子って、結構すごい立場なんじゃ……………。いいの……………？こんな簡単について……………。

「あの……………養子になったら、母にはあえるんですか？」

「いいえ、しばらくは会うことは許されません」

（母さんに会えない……………？なんで？）

「八重蔵様は貴女を葛城グループの跡取りにするおつもりなのです。しばらくはそのためにお母様と会うことは控えて頂きます」

は……………？

今なんつった？

あたしが、葛城グループの跡取り？

「……………ごめんなさい。やっぱりあたし、無理」

「…なぜです」

「当然でしょ！！！？あたしみたいな小娘が葛城グループの跡取りって、あんたもおかしいと思うでしょ！！！？」

なによこれ。こんなの、マンガだってありえないわよ。

「それでも、貴女様は八重蔵様が選んだ御方。あの方の眼力は絶対です。それに…」

「それに？」

「貴女に他に道は無いのです。元気な母君に会いたければ、早く跡取りにふさわしい人間となりなさい。」

選択の余地は、無いってこと？

「……………母さんの病気、本当に治るんでしょうね」

「無論。これまでと違い、最先端の医療を受けさせます」

「……………わかりました。行きます。」

それしか道が無いなら。

「歓迎します羽月様。これで正式に、貴女は葛城家の御子です。
……おい、車の準備を」

待って母さん。

あたし、絶対母さんに会いに行ってみせるから。

そのためなら……………

葛城家の跡取りだって、
なってみせる。

第2話

黒ずくめの男たちに半ば強制的に車に乗せられ向かった先は、見たこともないような大豪邸。

玄関の前で車を降りようとしたら、

「ここは門なので葛城邸はもう少し先です」

などと言われ（ということは、門から葛城邸までの間は庭ということになる）、とんだ辱めを受けた。

「羽月様、着きました」

車のドアを開けて降りようとしたら、黒ずくめの男Aに先にドアを開けられてしまった。

「いいよ別に、そんなことしなくても」

男は羽月の話など聞く必要がない、とでも言うように

「仕事ですから」

と返した。

先程通った門もかなり重そうだったが、玄関の扉さえも重そうだ。

なぜ推定なのかというと、やはり黒ずくめたちが扉を開けてくれているから。

羽月はしよっぱなから、この過保護すぎるくらいの扱いに嫌気がさした。

「よっこそ羽月様」

扉を開けてまず目に入っただのは広すぎる玄関と、この声の主。

「羽月様の世話係を務めさせて頂きます、滝川と申します」

彼は丁寧に頭を下げると、また元の直立不動の体勢に戻った。動くたび彼の黒髪がなびく。

格好は映画に出てくるような執事そのものの格好をしているが、そう見えないのは、彼が若く、整った顔をしているせいだろう。

「おまえらは下がれ。羽月様、お疲れでしょうからお部屋にご案内いたします」

自分より年上らしい黒ずくめをおまえら呼ばわりしているのを見ると、滝川は黒ずくめ達よりも上の立場なのだろう。

広い邸内を案内している間、滝川は通ってきた部屋を事務的に説明し、あとは口を閉ざしていた。

羽月の部屋（になった部屋）は、昨日まで住んでいた部屋の三倍は広いが、どこか寒々しい。

ベッドもキングサイズだったが、やはり慣れた自分専用の布団のほうで寝心地がよかった。

「・・・では、夕食の時間になりましたら呼びいたします。それまでおくつろぎ下さい」

滝川は私を玄関で出迎えたときのように丁寧に頭を下げた。

これは私情だが、この滝川という男、あまり好きではない。さつき玄関で顔を合わせてから今まで、一度たりと表情を変えていないのだ。意図的かは別として、見ているこちらとしてはあまり気持ち良

いものではない。

「・・・何故貴女なのでしょうか」

不意に、事務的なこと以外では口を開かなかった滝川が喋りだした。
・・・あまり良いことではなさそうだけれど。

「正直、八重蔵様がなぜ貴女を選ばれたのか、理解致しかねます」

「なっ・・・！」

「どうか葛城の名を汚すことの無きよう」

最初から最後まで、気に入らない男だ。

滝川はなにもなかったように

「失礼いたします」

と言って部屋を後にした。

屈辱的。

今の羽月に一番当てはまる言葉だろう。

しかし、これくらいでめげるような羽月ではない。

（負けるもんか・・・）

葛城家に、宣戦布告である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9956a/>

セレブ(仮)

2010年10月29日13時29分発行